

Shall we?

男女で共に考える、私たちのこれから

三鷹市
男女平等参画啓発誌

2026年
vol.

83



〇A〇B〇曜日はれ

大人世代もアップデート

子どもとジェンダー

子どもとジェンダー

かつて「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という社会規範が色濃い時代に育った今どきの大人世代。

対して、価値観の多様化が進む現代の子どもたちは、ジェンダー平等への意識が高くなってきています。

しかし今もなお、子どもたちが大人の何気ない言動から、

固定的なジェンダー規範を学習してしまうこともあるのではないのでしょうか。

今号の『Shall we?』では、子どもたちを取り巻くジェンダーについて、考えてみたいと思います。

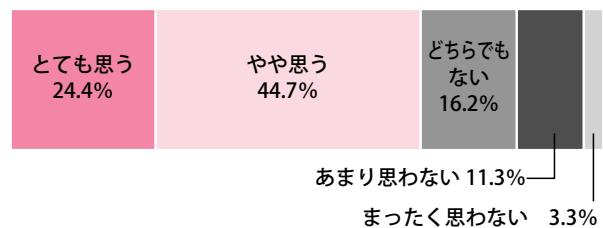
赤ちゃんの名付けで増えてきたジェンダーレスネーム

2025年に大手ベビー服メーカーが会員登録している顧客を対象に行った意識調査によると、赤ちゃんの名付けにジェンダーフリーの考え方が影響を及ぼしているかを尋ねた質問に対し、「とても思う」「やや思う」と回答した人は約7割にのぼりました。実際の名付けでジェンダーレスな名前にすることを重視する割合は、2017年調査の2.7%から11.2%へと、8年で約4倍に増えています。「名前から女の子らしさや男の子らしさを感じさせないことで、子どもが自由に成長できると思う」「性別に違和感が出たとしても、どちらでもいい名前ならずっと使ってもらえる」との声もあり、多様化する社会で子どもの幸せを願う親心が、ジェンダーレスな名前への追い風となっているようです。

ジェンダーフリーの考え方は、
名付けにも影響を及ぼしていると思いますか？

影響していると思う計 69.1%

(n=1,122)



名付けで「ジェンダーレスな名前にする」ことを
重視する割合

(n=509) 複数回答

8年で約4倍増！

2017年
2.7%

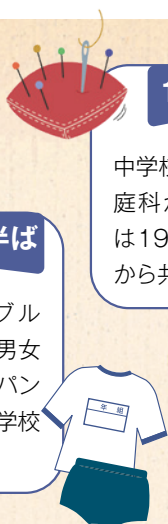
2025年
11.2%

出典：ミキハウス名づけ調査2025(三起商行(株) 2025年)



1990年代半ば

女子体育着のブルマーを廃止し、男女同じ形のハーフパンツへ移行する小学校が増加



1993年

中学校の全学年で家庭科が必修に(高校は1994年の1年生から必修化)

この数年前、1985年に
日本は国連の
女子差別撤廃条約
を批准

1989年

学習指導要領で中学・高校の保健体育で武道またはダンスが性別によらない選択制に

1958年

学習指導要領で中学校に技術・家庭科が誕生し、男子は技術、女子は家庭科を学習することに

時代は
性別役割分業が
強化された高度経済成長期

あなたはどの世代？

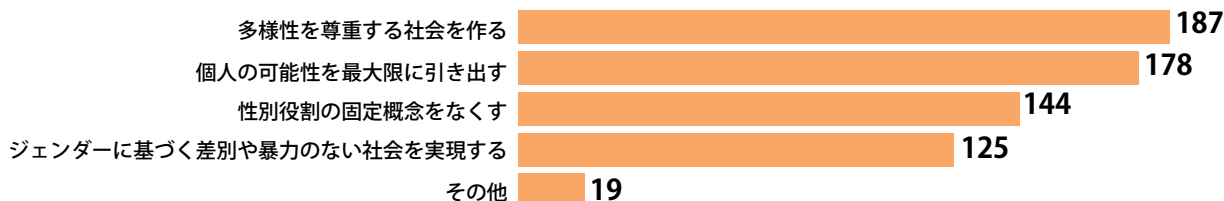


ジェンダーに
関連した
学校の変化

ジェンダー教育は必要！でも追いつけてないかも…な、今どきの大人たち

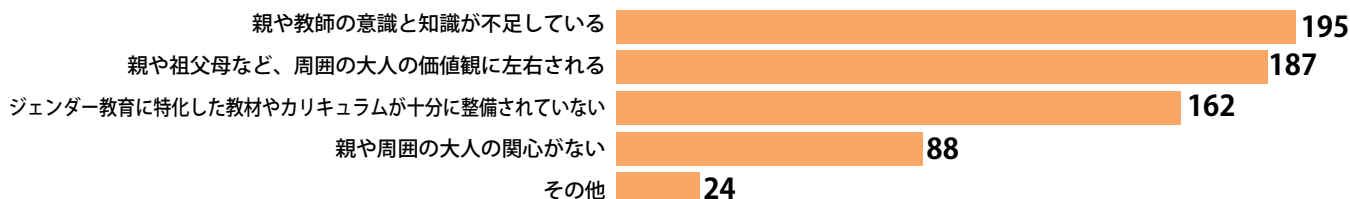
ジェンダー教育の目的、メリットについてどのように考えていますか

(n=290) 複数回答



ジェンダー教育を学んでいくことに対する懸念点は何だと思いますか

(n=290) 複数回答



出典：ジェンダー教育に関する意識調査(株式会社イー・ラーニング研究所 2025年)

eラーニング関連企業が2025年に、小学生の子どもがいる、または親族に子どもがいる人を対象に行った調査によると、7割を超える人が子どもの頃からのジェンダー教育は必要だと回答しました。ジェンダー教育の目的やメリットを尋ねた複数回答の設問では「多様性を尊重する社会を作る」に次いで「個人の可能性を最大限に引き出す」「性別役割の固定概念をなくす」などが支持を集めました。一方、ジェン

ダー教育で心配なことを尋ねた設問で多かったのは「親や教師の意識と知識が不足している」や「親や祖父母など、周囲の大人の価値観に左右される」などでした。

今どきの大人は、子どもたちがジェンダーを学ぶことで可能性を狭めずに成長できることや、多様性が尊重される社会になることを期待してはいるものの、親も含め周りの大人の意識が追いついていない懸念も感じているようです。

みんなであっปเดต！



2024年

都立高校入試で男女別の定員枠を撤廃し、性別によらず成績順で合格者を決めることに

※導入時期が地域や学校により異なる項目については、おおまかな年代としています。

2021年

学習指導要領が改訂され、男女別習も多かった中学の体育が原則男女共習に

2019年頃～

女子用のスラックスを含むジェンダーレスな制服を導入する中学・高校が増加

性的マイノリティへの配慮の必要性が広く社会に認識されるようになってきました

1999年に
男女共同参画社会基本法
が制定されました

2009年頃～

小学校で児童の呼称を、男子は「くん」女子は「さん」から男女共に「さん」で統一する学校が増加

2000年

都が男女平等参画基本条例の制定を機に男女混合名簿を推奨(2024年に100%達成)



中学2年生・ここさん

女の子なんだから、部屋をきれいにしなさい。足を閉じなさい。

小学1年生・ゆきおさん

かわいいぬいぐるみを「男の子なんだから」と言われて買ってもらえなかった。とても悲しかった。

高校2年生・いくらさん

「女(男)なのに○○やっているの意外!」というのは嫌みで言っていないと分かっているけれど、「自分がしたいからやっているのにな」ってモヤモヤするし、悲しい気持ちになりました。

高校1年生・S.I.さん

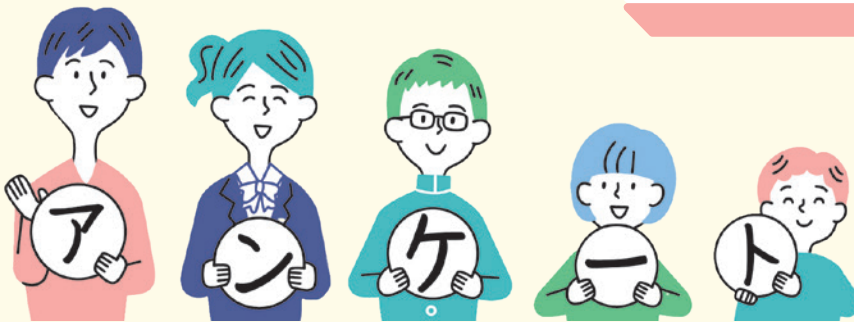
「男なんだから泣くな」と言われた。そんなこと関係ないと思いながら、男子は少し不遇な扱いを受けるものなんだと知った。

中学2年生・S.Y.さん

女子でもズボンをはいていいはずなのに、「女の子なんだからスカートをはきなさい」と言われた。悲しかった。

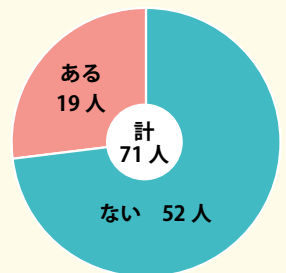
大学1年生・みさん

「女の子なのに野球してるんだ!」
→時代遅れな発想だなと思った。



三鷹の子どもたちに聞いてみました

あなたは「女の子(男の子)だから」「男の子(女の子)なのに」など、性別で決めつけられたり、性別でこれをやってはだめだと言われたりしたことはありますか？



ジェンダー平等の意識が浸透しつつある今、女の子(男の子)らしさの押しつけや決めつけをされた経験は「ない」という子どもたちが多数となっています。しかし、おおむね4人に1人は「ある」と答え、そのときに「悲しかった」「嫌だった」など、心が傷ついた子がいることも事実です。そのことを、大人世代はしっかりと受けとめる必要があるのではないのでしょうか。

高校1年生・ryoさん

「男なんだから少しは荷物運ぶの手伝え」と言われた。それもそうかと思った。

中学1年生・H.S.さん

髪が長すぎてヘアピンを使ったら「お前、男なのにヘアピン付けんの?」って言われて、少しイラついた。

小学5年生・こななさん

私が女の子だからか、小さい頃にもらった親戚のおばさんからの誕生日プレゼントは、ピンク色かフリルの付いた服で、嫌だった。

高校2年生・みなとさん

服装や髪型、座るときの姿勢など。小さい頃はなぜそんなことを言われるのか分からなかったが、中学生になるとなんとも言えない気持ち悪さがあって、嫌だった。髪を切るたびに親とケンカになり、ストレス。

高校2年生・まおさん

「女の子なんだから少しはメイクや服に興味を持ちなさい」と言われた。別に女の子でもメイクに興味なくてよくない?と思った。

高校1年生・しょうちゃんさん

恋愛で「男なら自分からガツガツ積極的について、男から告白すべきだ」と言われた。確かに強くありたいが、自分からあまりいい人にもいるのに、この風潮はよくないと思う。

子どもたちに、よりよい社会を手渡したい

三鷹市在住 深沢玲子さん

高校1年生と小学6年生の女の子を育てている深沢さん。娘さんは二人とも、学校では女子と男子で特に違いを意識することはないと話しているそうです。また、保護者行事に参加する父親が長女のときよりも次女のときの方が多いなど、深沢さんもジェンダー平等が年々進んできていると感じています。とはいえ、日常生活の中で心にひっかかることもあるそうです。

「政治や経済、科学技術分野に関するニュース映像がほぼ男性で占められている様子を見たときは娘に『(この人たちのクラスメイトだった)女の子たちはどこへ行っちゃったんだろうね?』と問いかけをしています。私自身、社会に出てから男女の処遇の違いを感じたので、娘たちが同じ思いをせずに済む社会になってほしいと願っています」

メディア関連の調査会社に勤める深沢さんが、ジェンダーを明確に意識するようになったのは、次女の育休から復職した2015年のこと。

「復帰直後に携わったのがワーママ(働く母親)のマーケティングだったのですが、そこで見えてきたのは女性活躍とはうらはらな、『女性たちが置かれた過酷さや生きづらさ』でした。それは当時の私が抱えている問題でもあり、CM

のジェンダー表現に関する研究・発信をするようになりました」

また、親世代との認識のギャップについても、慎重に言葉を選びながら対応しているそうです。

「帰省した際に娘が家事を手伝ったところ、義母が悪気なく『やっぱり女の子だね』と褒めました。それを否定して傷つけたくはないけれど、黙認するのも違うと思うので、やんわりと『今は男とか女とかいう時代じゃないですよ』と言いました。たぶん、義母も分かってはいるけれど、ふと口をついて出たのだと思います」

暮らしの中で見聞きする

固定的なジェンダー規範に

疑問を持つこと。それは、子どもたちに自分がやりたいことを自由に選んで生きる力をもたらす、大切な視点ではないでしょうか。



自宅の本棚には自立した女性像やジェンダーに関する絵本を置いているそうです



写真左から、蛭田先生、松浦先生、石川先生

共に学び進化する学校のジェンダー平等

法政大学中学高等学校

国語科教諭 松浦麻紀子さん、社会科教諭 石川秀和さん、養護教諭 蛭田絹子さん

市内にある法政大学中学高等学校では近年、法政大学 DEI センター^{*}と連携しながら、生徒会役員による同センター訪問や、生徒・保護者・教職員が共に参加する第1回ジェンダー平等ワークショップなどの取り組みを行っています。その中心的な役割を担っているのが松浦先生、石川先生、蛭田先生の3人です。養護教諭の蛭田先生は、多様に配慮した学校環境整備の必要性を強く感じた出来事があるそうです。

「吐き気で保健室に来た生徒が、(男女別の)学校のトイレに入れないから早退したいと言ったんです。聞けば、入学以来ずっと自宅のトイレ以外は使っていなかったそうです。性的マイノリティの当事者にとってトイレがどれほど切実な問題かを痛感しました。教職員が認識していないところで、辛い思いをしてきた生徒がこれまでもいたのだらうと思うと、とてもショックでした」

2022年度に制服をスラックスとスカート、ネクタイとリボンから選択でき、あえて女子・男子に分けない表記にしたところ、石川先生は翌年の新入生から「正装時もスラックスをはけるから入学したいと思った」と聞きました。今ではだいぶ普及してきた感のある制服のジェンダーレス化ですが、

式典などでは女子のスカート着用が定められている学校もあるようです。

また、同校ではジェンダー平等や多様性を尊重する意識を日頃から各教科で伝えていくことを心掛けているそうです。

「試験で『男同士のノリ』といわれるような同調圧力に負担したくない男子もいる』といった内容の文章を出題にすることがあります。固定的な男らしさを息苦しいと思っていそうな生徒もいる中で、何らかの気付きになればと思いました」と、国語科の松浦先生。社会科の石川先生は、「ジェンダー平等は日本国憲法にある基本的人権の尊重に深く関わることです」と語ります。

子どもも大人も学び続けることで、誰もが過ごしやすい学校に。その思いを胸に、3人の先生方はこれからもワークショップなどの取り組みを継続したいと話してくださいました。



^{*}法政大学ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョンセンター：DEI(多様性、公平性、包括性)を重視した学校運営の実現を図る拠点施設。写真は2024年の生徒会役員訪問時の様子。

「ふつう」を問い直すことから、ジェンダー平等は始まる

ジェンダー教育実践家
星野俊樹さん

◆◆「ふつうって何だよ」と思い続けた子ども時代

小学生のころから、学校が押しつけてくる「ふつう」に、しんどさや生きづらさを感じていました。運動会では性別で種目が決められ、女子はチアダンス、男子は上半身裸で騎馬戦や組体操。嫌だという声すら上げられない空気の中で、「ふつうって何だよ」と思い続けていました。

転機は大学生のころ。講義でジェンダーやセクシュアリティを学び、ずっと感じてきた生きづらさの正体を知りました。「自分と同じ思いを子どもたちにさせたくない」という思いから教師になり、包括的性教育のガイダンスを参照しながら、性の多様性やジェンダーバイアスについて子どもたちと考え続けてきました。

◆◆「隠れたカリキュラム」に要注意

多様性という言葉は、この数年でずいぶん市民権を得たように思います。けれども、「女らしさ」「男らしさ」というジェンダー規範やステレオタイプは、いまだに根強く残っています。女の子には「おしとやかにしなさい」、男の子には「男だから泣くな」。その声をかける大人の姿を、いろいろな場所でもよく目にします。

「隠れたカリキュラム」とは、学校生活の中で暗黙のうちに子どもたちに伝達される価値観や規範、行動様式を指します。誰かが意図して教えているわけではありません。運動会の種目分け、出席簿や整列の男女別、係活動の割り振り、「〇〇さんは女の子なのに」という何気ない一言。そうした無数の小さな出来事の積み重ねが、「ふつう」という名の鋳型に子どもたちをはめていきます。

◆◆「私は」を主語に、自分語りからはじめる

ジェンダー平等と考えると、少し身構えてしまう方もいるかもしれません。でも、難しく考える必要はありません。フェミニズムには「個人的なことは政治的なこと」という言葉があります。「自分が感じているしんどさは、自分の性格や能力の問題ではなく、社会の仕組みから来ているのかもしれない」という気づきを表す言葉です。一人ひとりのもやもやを個人の内側の問題として閉じ込めず、声にしていい、それ自体が社会を問い直す営みになる、という考え方です。

これまで生きてきた中で感じているもやもやと、まず向き合ってみてください。父として、母として、先生として、といった肩書きをいったん脇に置き、一人の人間として、「私は」を主語にした一人称で語ることから始めてほしいのです。

「自分語り」はとかく避けられがちです。けれども、実際に語ってみると、「自分も同じことを考えていた」と共感してくれる人が必ず現れ、そのもやもやが自分だけのものではなく、社会とつながっていることに気づかされます。

親子であつても、お互いに一人の人間同士として、もやもやを一人称で語ってほしいのです。子どもは、そんな親の姿を新鮮に、親近感をもって受け止めるはずです。そして、そこからジェンダー平等のための親子の学びはスタートします。

◆◆幸せになるためのジェンダー平等教育

「子どもにジェンダーをどう教えたらいいかわからない」という保護者の声もよく聞きます。そんなときは、「子どもと一緒に学んでいけばいい」親

も間違えたつていい」とお伝えしています。

私自身、子どものころ、先生の失敗談を聞くのが好きでした。抑圧された学校生活の中で、先生が失敗談を語るときだけは、教師という鎧を脱いでくれたように感じられたからです。一人の人間として、とても身近に感じられたのを覚えています。だから私も、授業では自分の失敗談を話すようにしてきました。大切なのは、その失敗とどう向き合い、何を学んだかを正直に伝えることです。

私は、ジェンダーを学ぶ理由をこう伝えていきます。「『ふつう』が社会によって作られたもので、時代とともに変わっていくものだと思えば、自分をはじめ、自分自身と、そして大切な他者とも、健全な関係を築ける。だから、ジェンダーを学ぶことは、幸せになるためなんだよ」と。

Profile

星野俊樹(ほしのとしき)

ジェンダー教育実践家。出版社で編集の仕事をした後、小学校教員に転職。教員歴は20年。ジェンダー平等を目指す教育実践に取り組んできた。2025年3月末に退職し、現在は執筆や講演などを通じて活動の幅を広げている。単著に『とびこえる教室—フェミニズムと出会った僕が子どもたちと考えた「ふつう」』(時事通信出版局)。

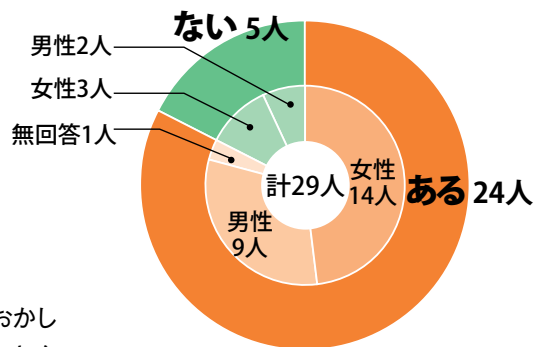
<https://toshikihoshino.space>



市民の皆さんに聞いてみました

ジェンダーにまつわる “今思うと変なルール・習慣”は ありますか？

今回の質問では、おおむね8割の人が「ある」という結果に。「今思うとおかしいのでは？」と思えるのは、社会の価値観がアップデートされてきた証しともいえます。現在もまだ残っている事例を挙げた方もいて、見直しの余地はまだまだあるといえそうです。



ある

母の役割は女の子が引き継ぐという暗黙の了解のようなものがあり、女の子はきれい好きで料理が女の子よりできて当然というイメージがあった。

(HWさん・40代女性)

ない

やってみたいことはできる環境だった。

(nutsさん・50代女性)

ある

男子の制服はスカートが許可されていません。夏の猛暑日などスカートのほうが涼しいと感じます。許可されると幸いです。

(Y・Kさん・10代男性)

ある

遠足で並ぶときも、卒業式で名前を呼ばれるときも、男子からでした。当時は何の疑問もなく「順番は男子が先」と思っていました。

(MSさん・50代女性)

ある

ランドセルに限らず、男性は青や黒、女性は赤やピンクが主流で、持ち物が黒や青系だと「男みたい」と言われることがありました。

(ほかさん・30代女性)

ある

男の子は青、女の子はピンクで表記すること。トイレのマークもいまだに男性が青で女性が赤が、残っています。

(S.W.さん・60代男性)

ない

髪型・服装に関するルールはほぼなかった。ラグビー部に女子選手部員もいたし、アフロヘアの女子もいた。

(Kさん・30代男性)

ある

小学校の体育着がブルマーだった。下着がはみだすことを当時は「はみパン」と言って笑い合っていたが、今考えればありえない。

(アボカドさん・40代女性)

ある

小学校の給食で食べ残しを減らすため、男子は絶対におかわりをしなければいけなかった。

(こあゆさん・20代女性)

ある

小学6年生まで男女同じ教室で体操着に着替えさせられていた。生理中の着替えがとても恥ずかしかった。

(とねさん・30代)

ある

自治会の会長は男性という習慣が残っている。おかしい習慣だと思っている。

(はじめさん・50代男性)

ある

テニスサークルの入部にセレクションというのがあり、女子は美人で可愛げのある子が選ばれ、私たちは落ちました。

(すずらんさん・40代女性)

ご意見・ご感想を募集中

アンケートフォームからご回答ください。次号に掲載された方には図書カードを差し上げます。
<https://logoform.jp/form/ejBZ/1708203>

※掲載時には内容を要約するなど、一部修正させていただくことがあります。ペンネームの記載がない方の名前は、イニシャルで掲載します。
記入いただいた個人情報は本誌に関する以外に使用せず、正当な理由がない限り無断で第三者に提供しません。



『Shall we?』

第82号特集

「女性の政治参加」
に寄せられた
読者の声

●女性に限らず、老若男女すべての人が「自分ごと」として政治に関わっていくことが、より良い未来をつくっていくと思っています。一人ひとりが諦めずに行動を起こしてほしいと願っています。
(こめめさん・50代女性)

●三鷹市議会の女性議員比率が都議会や国会よりも高いことに驚いた。また、女性議員へのハラスメントの実態は、政治参加を妨げる大きな課題だと感じた。
(セシルさん・40代男性)

●性別や本人・家族の年齢、環境などによって違いはあると思いますが、それぞれが「違い」を持っている人たちに敬意を払えるような、チャレンジできる環境がつけられたらいいと思います。
(が～さん・60代女性)

相談員 だより

家族関係をひもとく対話の力 こころの相談室相談員



人生100年時代といわれる今、親との関わりはおのずと長くなってきています。そのため、相談者の主な悩みが夫婦関係や子育ての場合でも、親との関係が深く関わっているケースがよくあります。「夫にとっては義父にあたる父の通院に付き添ってもらったところ、夫の機嫌が悪くなり、夫婦関係が悪化した」「子育てを手伝ってもらい助かるけれど、母に嫌悪感を抱いてしまう」「親の介護を担っているきょうだいから愚痴を聞かされるのが辛い」といった悩みの背景には、生い立ちや過去のさまざまな経験、親への葛藤なども影響しているものと思われます。しかし、身近な存在である家族の悩みだからこそ、目の前のことに追われる日常生活の中で自分の気持ちを整理し、客観視するのは難しく、感情の糸が絡みあってしまうこともあるのではないのでしょうか。

昨今は、悩みをAIに相談する方も増えてきたようですが、こころの相談室では相談者と相談員が対話をする中で、相談者が自分の気持ちを吐き出し、状況を整理し、自分と向き合っていくスタイルをとっています。家族のプライベートなことを誰かに話すのは勇気がいることだと思いますが、相談員は守秘義務を守り、安

全な環境を提供しています。もしも今、あなたが悩みを抱えているのであれば、当相談室でその思いを一度、外に出してみませんか。ご相談をお待ちしています。

●こころの相談室 ※事前予約制。1人50分まで

相談日時：〈女性向け〉毎週木・土曜日午後1時～5時
〈男性向け〉毎月第3水曜日午後5時～8時

利用方法：平日午前8時30分～午後5時に相談・情報課（市役所2階 ☎0422-44-6600）へ

●こころの相談ダイヤル ※予約不要。1人30分まで

電話相談日時：第2火曜日午後1時～4時
第4火曜日午後5時～8時

利用方法：相談員直通電話 ☎0422-29-9864へ

●男女平等参画相談 ※事前予約制

男女各1名の弁護士が、人権侵害（ハラスメント・DVなど）についての相談をお受けします。

利用方法：平日午前8時30分～午後5時に相談・情報課（市役所2階 ☎0422-44-6600）へご予約ください。



編集後記

これまで守り育てられてきた伝統や文化についても、その背景や意味を理解し、子どもたち自身が考えながら未来へつないでいけたらと思いました。

（上田敏博）

その時代の出来事や社会の背景に合わせ、学校のルールや考え方も少しずつ変わってきたことが印象に残りました。これからも時代の変化に目を向け、私たち自身も柔軟に考え方をアップデートしていくことが大切だと感じました。

（是井智洋）

私が子どもの頃は、ランドセルの色は赤か黒が定番で、茶色はおしゃれに見え、うらやましかったです。時が経ち、青やピンクを超えて自分らしいランドセルの色を選ぶ子どもたちが、また少しうらやましく思えます。

（松井真由美）

性別の決めつけが「悲しかった」とアンケートに書いている子が複数いて胸が痛みました。どんな子も「否定されない」「押し付けられない」社会につながるよう、私たち大人は日々の言動を見つめ直していきたいですね。

（山本磨希）

みたかSOGI相談（性の多様性に関する相談）

自分や親しい人の性別や性のあり方に関する悩みに、秘密厳守で応じます。



◆相談日時 〈対面〉毎月第3金曜日午後5時30分～7時30分（1人50分まで、事前予約制）

〈電話〉毎月第1金曜日午後5時30分～8時30分（初回45分程度、2回目以降30分程度）

◆利用方法 〈対面〉上記QRコードから専用申込フォームまたは ☎0422-29-9032へ

〈電話〉相談日時に相談員直通 ☎0422-29-9864へ

三鷹市パートナーシップ宣誓制度

LGBTQのカップルが、お互いを人生のパートナーとすることを宣誓し、市が宣誓を受理したことを証明する制度です。



「Shall we?」は、電子ブック・PDFでご覧いただけます。
下記の施設などでも配布しています。

市役所、JR三鷹駅、郵便局、女性交流室、保育園、幼稚園、コミュニティ・センター、図書館、学童保育所



Shall we? 第83号 2026年9月発行
企画・編集：三鷹市企画部平和人権課
〒181-8555三鷹市野崎1-1-1 ☎0422-29-9032
市民編集委員：上田敏博、是井智洋、松井真由美、山本磨希
制作協力：株式会社工房

